### [5-5]

地域と大学の協働によるまちづくりワークショップの 可能性-第1回「よっさまちづくり会議」を事例とし て-

準会員 ○外石広美\*
正会員 籔谷祐介\*\*
会員外 串田優衣\*
会員外 高橋沙綾\*
正会員 萩野紀一郎\*\*\*

 ワークショップ
 コミュニティ
 まちづくり

 地域活性化
 吉久
 学生

#### 1 研究の背景と目的

富山県高岡市吉久地区(以下、吉久)は藩政時代に加 賀藩最大の御蔵があったことで米の集積地として栄えた 地域である1)。現存している町家は幕末から明治初期に かけて建設されたもので、「さまのこ」と呼ばれる特徴 的な細かい千本格子を持つ。町家が連なる緩やかにうね った通りは、このまちが刻んできた歴史を喚起する(写 真 1)。ここは重要伝統的建造物群保存地区(以下、重 伝建) 選定に向けて、高岡市からの要請を受けた文化庁 によって 1993 年に保存対策調査が行われた。現在重伝 建の選定に向けて、吉久まちづくり推進協議会(以下、 協議会)や NPO 法人吉久みらいプロジェクト(以下、 NPO)が主体的に街並み保存の活動を行っている。選 定に向けては、ただ街並みを保存するだけではなく、ま ちをどのように活用していくのかを考えることが重要で あり、まちづくりのビジョンを明確化し、住民がそれを 共有する必要がある。そこで協議会と NPO から富山大 学芸術文化学部萩野研究室・籔谷研究室に相談があり、 住民がまちづくりについて話し合うための「第1回よっ さまちづくり会議」を開催することとなった。本研究は 地域と大学が協働し、まちづくりについてワークショッ プ形式で話し合うことで、地域住民に対してどのような 効果があるのかを検討し、その課題と可能性を示すこと を目的とする。

# 2 研究方法

# 2-1 対象地域

対象地域である吉久は、高岡駅から北東におよそ 5 km、小矢部川と庄川に挟まれた河口近くに位置する(写真2)。人口は1,358人で、556世帯である(平成31年2月28日現在)<sup>2)</sup>。用途地域は準工業地域で周りは工場に囲まれている。高齢化が深刻であるが、近年では一部ミニ開発が行われ新しい若い世帯が入居し始めている。

吉久は「高岡市歴史まちづくり計画」において、重点 区域に位置づけられている。重点区域とは、高岡の歴史 的風致の維持及び向上を図るための施策を重点的かつ一 体的に推進することが必要な地域のことである。具体的 に言えば歴史的建造物の保存修理や周辺環境の整備、祭 礼・年中行事の継承と担い手の育成などが挙げられる<sup>3)</sup>。



写真1 吉久の街並み



写真 2 吉久の航空写真 (GoogleEarth を元に筆者作成)

表 1 アンケート調査項目

	アンケート項目
属性	年代、居住地域、職業
イベント参加	参加きっかけ、第1部・第2部感想(記述式)、満足度・その理由(記述式) まちづくりへの関心、今後の意向
学生と吉久の関わり	学生の吉久居住についての賛否・その理由(記述式)、学生に期待すること

# 2-2 調査方法

「第1回よっさまちづくり会議」を開催し、終了後に参加者全員(ファシリテーターを除く学生参加者も含めて)に対してアンケート調査(匿名式)を行った。調査項目は大きくは 1. 属性 2. イベント参加 3. 学生と吉久の関わりである。詳細は表 1 に示す。

# 3「第1回よっさまちづくり会議」

# 3-1 「第1回よっさまちづくり会議」の概要

「よっさまちづくり会議」とは、住民が主体となって

Possibilities of the Community Development Workshop by collaboration between local residents and university

-Case Study of the First Yossa Community Development Conference-

SOTOISHI Hiromi et al.

吉久のまちづくりを考えていくための話し合いの場である。第1回は"吉久らしい空き家活用を考えよう"をテーマとして開催した。開催日時は平成31年2月17日(日)10:00~12:00、場所は吉久公民館である。対象は吉久に居住しているか否かに関わらず、吉久のまちづくりに関心のある者とした。主催は協議会とNPO、共催は大学である。参加人数は学生含め46名であった。イベントの告知についてはチラシを作成し、吉久全戸に配布した。また、大学内にポスターを掲示し、SNSでも発信を行った。さらに、新聞にも掲載された。会議は第1部・第2部で構成され、第1部は「学生による自力建築型シェアハウスinよっさ」、第2部は「吉久らしい空き家活用を考えるワークショップ」であった。

#### 3-2 「学生による自力建築型シェアハウス in よっさ」

卒業研究で吉久についての研究・提案を行った萩野研究室4年生の発表の場を設けた。タイトルは「戸建て空き家群の再編」で、家の裏側にある元用水路などの空き地を再編し、住民のコミュニティを再構築するといった内容であった。また、別の学生3名は吉久の町家をセルフリノベーションし学生シェアハウスをつくる計画案を発表した。その後質疑応答が行われ、住民からは資金についてはどうするかなどの質問や周辺住民と積極的にコミュニケーションを取った方が良いというアドバイスがあった。

## 3-3 「吉久らしい空き家活用を考えるワークショップ」

ワークショップでは実際の空き家を題材にして、そ の活用方法について話し合った (写真3)。話し合いは6 グループに分かれ、1グループは6,7人で構成した。各 グループには、空き家の平面図と吉久の地図が配布され た。全体進行を教員が担い、各テーブルに学生が配置さ れファシリテーターを担った。最初にワークショップの 方法について教員から説明した。その際、他者の意見に 対し否定をしないこと、質より量を大切にすること、実 現性を考えすぎない自由な意見を求めること、他者の意 見に積極的に便乗すること等、ワークショップをの心得 を伝えた。50 分間の話し合いの後、各グループの代表 者が順番に話し合った内容を発表した。一例として第2 公民館という活用方法があった。空き家が吉久の中央に 位置し段差がないことから、市民が集まりやすく様々な 催しが可能であるという考えであった。住民が気軽に集 まり、趣味の教室や展示の出来る場所である。

## 4 アンケート結果

アンケートは 46 名 (回収率 100%) からの回答を得た。以下にその結果を示す。

# 4-1 属性

年代で最も多かったのは「70代」の 20名 (43.5%) で、次いで「60代」の 9名 (19.6%)、「50代」の 6名 (13.0%) と続いた。「19歳以下」は 4名 (8.7%)、「20代」は 4名 (8.7%) であった (図 1)。

居住している地域は「吉久」が 25 名 (54.3%) で、



写真3 ワークショップ



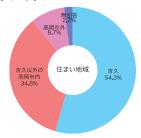


図1 年齢

0~10年末満 2.2% 10~30年末満 2.2% 20~50年末高 6.5% 居住年数 50~70年 末満 26.1%

図2 居住地域



図3 居住年数

「吉久以外の高岡市内」 が16名(34.8%)「高岡市 外」からも4名(8.7%) いた(図2)。

吉久に居住している人 の居住年数は「50~70 年 未満」が 12 名 (50.0%)

図 4 職業表 2 居住のきっかけ

居住のきっかけ	n
生まれた土地だから	6
結婚	4
家の購入	1
移住	1
友達の薦め	1
計	13

で最も多く、「70 年以上」も 7 名 (29.2%) であった。 一方で「 $0\sim10$  年未満」「 $10\sim30$  年未満」は共に 1 名 (4.2%) であった (図 3)。

吉久への居住のきっかけは「生まれた土地だから」が 6名で最も多く、次いで「結婚」が4名、「家の購入」が 1名、「移住」が1名、「友達の薦め」が1名であった (表2)。

職業については「無職」が 13 名 (28.3%) で最も多く、次いで「自営業」が 9 名 (19.6%)、「学生」が 7 名 (15.2%) であった (図 4)。

#### 4-2 イベント参加

イベントへの参加のきっかけ(複数回答可)は「まち

づくりに興味があるから」が 34 名で最も多く、次いで 「空き家問題が不安だから」が22名、「他の住民と話す ため」が9名、「今後のまちが不安だから」が9名、「ま ちに貢献したいから」が8名、「誘われたから」が8名、 「役職などの立場的に」が5名、「その他」が3名であ った(図5)。

イベントの満足度については「満足」が30名(65.2%) で最も多く、次いで「やや満足」が 12 名 (26.1%) で あった。「わからない」が1名(2.2%)いたものの、「や や不満 | 「不満 | 共に 0 名であった (図 6)。その理由に ついては「楽しかった」が6名で最も多く、次いで「今 後への期待」が3名、「自分自身への良い影響」が3名、 「住民との交流」が 3 名、「住民の意欲を知ることが出 来た」が3名であった(表3)。

まちづくりへの関心については「高まった」が25名 (54.3%) で最も多く、次いで「どちらかと言えば高ま った」が 16 名 (34.8%) であった。「わからない」が 3 名(6.5%)いたものの、「どちらかといえば低くなった」 「低くなった」が共に0名であった(図7)。

今後のまちづくりへの参加の意向については「積極的 に関わりたい」が23名(50.0%)で最も多かった。次い で「機会があれば関わりたい」が21名(45.7%)であっ た。「関わりたくない」は0名で、「わからない」は1名 (2.2%) であった (図8)。

第 1 部の感想については、「学生の考えや提案に対す る感心」が 14 名で最も多く、次いで「若者の考えに対 する感心」が6名であった(表4)。第2部の感想では 「継続的な開催への期待」が 7 名で最も多く、次いで 「活発な意見交換に関するもの」が 6 名、「実現への期 待」が4名であった(表5)。

## 4-3 学生居住について

学生居住に関して「賛成」が 36 名 (78.3%) で最も 多く、次いで「どちらかと言えば賛成」が4名(8.7%) であった。「どちらとも言えない」は0名で、「どちらか と言えば反対 | が 1 名 (2.2%) いたが、「反対 | が 0 名 であった(図9)。

理由としては「まちの活性化」と「若者が与える良い 効果」が共に6名で最も多く、次いで「若者移住を促す 効果」が4名、「学生の学びの場」が2名であった(表

表 3 満足度の理由

理由	n
楽しかった	6
今後への期待	3
自分自身への良い影響	3
住民との交流	3
住民の意欲を知ることが出来た	3
良かった	3
イベントの改善点の指摘	2
学生との交流	2
活気が感じられた	2
住民以外との交流や意見交換	2
その他	5
計	34

表 4 第 1 部 感 想		
第1部 感想	n	
提案に対する関心	8	
提案に対する期待	6	
若者の考えに対する関心	6	
良かった	4	
提案に対する意見	3	
若者に対する期待	3	
楽しみ	3	
まちづくりの新しい展開	2	
資金に関する課題	2	
その他	6	
計	43	

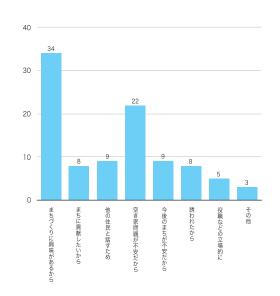


図5 イベントへの参加きっかけ

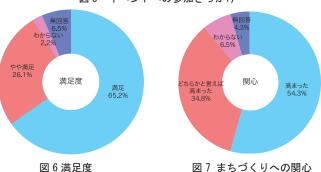


図 6 満足度



図8 まちづくりへの参加意向

学生居住

図 9 学生居住の賛否

表 5 第 2 部感想

第2部 感想	n
継続的な開催を期待	7
活発さ	6
実現への期待	4
学生の効果	3
参考になった	3
良い経験になった	3
新たな意見	2
自身への効果	2
住民の熱意が伝わった	2
いろいろな意見が聞けた	2
楽しかった	2
良かった	2
その他	3
<u>≣</u> +	41

表 6 学生居住替成の理由

学生居住への回答の理由	n
まちの活性化	6
若者が与える良い効果	6
若者移住を促す効果	4
学生の学びの場	2
少子高齢化対策	2
若者の居住が嬉しい	2
その他	6
計	28

表 7 学生に期待すること

学生に対する期待	n
住民とのコミュニケーション	8
地域活動への参加	6
考えを伝えること	2
継続性	2
より多くの学生が関わること	2
その他	5
計	25

6)

学生に期待することは「住民とのコミュニケーション」が8名で最も多く、次いで「地域活動への参加」が6名、「より多くの学生が関わること」が2名であった(表7)。

#### 5 考察

#### 5-1 地元の若者の参加不足

属性に関して、参加者は「60代以上」がおよそ6割であった。参加者の約半数を占めた吉久に居住する人は、その居住年数を見ると多数は「50年以上」である。以上から、参加者は吉久に長く居住している高齢者であることが分かる。参加者は「10代」「20代」「30代」「40代」合わせて11名であったが、全員が吉久以外の地域に居住していた。このことから、吉久に居住する若者や子育て世帯の参加がなかったことが分かる。

また、参加者の約半数は吉久以外の地域から訪れた。 吉久以外の地域から訪れた参加者で比較的多かった理由は「誘われたから」であった。しかしながら、まちの持続性を考えると若い層の参加は必須である。今後も継続してこのイベントを続けていく場合、若い層をいかに取り込むか検討が必要である。ただし、吉久以外に居住する若い層の参加も見られたため、そうした人たちと上手く協働してまちづくりを進める可能性も考えられる。

加えて参加者の職業を見ると、「無職」や「自営業」、「学生」などが多かった。比較的時間に融通がきく職業であると推察できる。そうした職業の居住者に参加を促すことも効果的だと考えられる。

# 5-2 参加者の関心を高める効果

イベントの満足度は「満足」と「やや満足」を合わせ るとおよそ9割であった。まちづくりへの関心も「高ま った」と「どちらかと言えば高まった」を合わせておよ そ9割であった。今後のまちづくりへの参加の意向につ いても「積極的に関わりたい」と「機会があれば関わり たい」を合わせておよそ 96%であった。このことから、 イベントに参加することで多くの人の意識が高まったこ とが分かる。また、参加のきっかけが「誘われたから」 「役職などの立場的に」という消極的な理由である者も 13 名いたが、このうち 11 名の関心が高まっていた。こ のことから、今回のイベントは消極的な理由で参加した 人も含めて参加者の関心が高まっていることが分かる。 以上より満足度の高いイベントを行うことで、まちづく りへの関心が高まり、参加の意向も高まると考えられる。 また第2部の感想で多かったのは、「継続的な開催へ の期待」や「活発な意見交換が出来た」、「実現への期待」 であった。このことからも、様々な年代や立場の人が混 ざり合って活発な意見交換をすることによってまちづく りへの期待が高まったことが窺える。以上から多様な人

高める効果があると考えられる。

また、継続的な開催を期待する声が多く上がったこと から、今後も定期的なイベントを実施していく必要があ ると考えられる。

#### 5-3 学生居住に期待する効果

学生が吉久の空き家に住むことに関しては「賛成」「どちらかと言えば賛成」がおよそ9割であった。理由としては「まちの活性化」、「若者が与える良い効果」であった。若者に期待することは、「住民とのコミュニケーション」「若者の地域活動への参加」などが多く挙げられた。多世代交流や若者の地域活動への参加によってまちが活性化すると考えられているため、参加者の多くが高齢化の進む地域に若者が居住することに賛同している。

また、第1部の感想で「学生の考えや提案に対する感心や期待」が最も多く挙げられ、学生の発表が住民の期待感を高めた可能性があると考えられる。学生居住に関しては「学生の学びの場になる」という意見もあった。さらに、学生からは「今まで自分が知らなかった考え方にも触れることが出来た」「自分の知らない視点での捉え方に気づくことが出来た」などの意見もあり、学生が地域住民とコミュニケーションをとることによるメリットもあると考えられる。以上より、学生が地域のまちづくりに参加することは、地域と学生の双方にとって良い効果があると期待されており、この点において地域と大学が協働する意義があると考えられる。

# 6 まとめ

本研究では地域と大学が協働し、まちづくりについてワークショップ形式で話し合うことで、地域住民に対してどのような効果があるかをアンケート調査を用いて検討した。その結果①今回のイベントには地元の若者の参加不足という課題と、吉久以外の人との協働の可能性が示唆された。そして、②参加者の意見交換を行うワークショップによって参加者の関心を高める効果が期待出来ることが分かった。加えて③学生が地域のまちづくりに参加することは地域と学生の双方にとって良い効果が対策されていることを明らかにした。以上より地域と大学が協働で実施するまちづくりワークショップの課題と効果、及びその可能性を示すことができた。今後は継続的に実施することによる長期的な効果を検証することが必要がある。

# 参考文献

- 高岡市教育委員会、高岡市吉久地区伝統的建造物群調査報告書、 平成7年3月
- 2) 高岡市市民生活部市民課、住民基本台帳(平成31年2月28日)
- 3) 高岡市、高岡市歴史まちづくり計画概要版、平成23年3月
- 4) 山口太郎、富山県高岡市における歴史的街並み保存

- \* 富山大学芸術文化学部 学部生
- \*\*\* 富山大学芸術文化学部 講師・修士 (デザイン学)

が集まって意見交換する場がまちづくりの関心や期待を

- \*\*\* 富山大学芸術文化学部 准教授・博士(工学)
- \* Undergraduate., Facalty of Art and Design, Univ. of Toyama
- \*\* Senior Asisst.Prof., Facalty of Art and Design, Univ. of Toyama,M.design \*\*\* Associate Prof., Facalty of Art and Design, Univ. of Toyama,PhD